

BOOK GUIDE

今月のブックガイド

カフェで、膣会、膣トーク

本書のノルウェー語での原題は、『膣の幸せ』。その名の通り、女性器を知る楽しさ、幸せな人生のための〈性〉の話がたっぷり。著者のニナとエレンは、オスロ大学医学部での学生時代に、性教育のボランティア講師を務めるなかでたくさんの質問や不安を打ち明けられた。その体験から開設された〈性器〉というタイトルのブログは、ノルウェー最高のアクセス数を誇る健康情報ブログに成長。そして、2017年の原書の出版後、1年を待たずして30の言語に翻訳され、日本語版は2019年12月25日に発刊。現在は医師として働く彼女たちから、素敵なおクリスマスプレゼントが届いた。

医学生だった彼女たちの「誰にも負けない強み」だという「いかにも“しろと”っぽい質問を平気のできる図太さ」によって、本書は相当な分量と高い専門性を持ちながらも、誰もが一度は考えそうな疑問や不安についてわかりやすく解説されている。執筆中に彼女たち自身が「女性器にまつわるまちがった通説にまどわされていた」と気づいたように、専門家による上から目線の情報提供ではなく、読者と一緒に〈性〉を探求しようとする好奇心と行動力に満ちている。〈性〉の研究では、まだわかっていないことがたくさんあるという。〈性〉の研究に興味を持つ女子が増えるかも。リケジョならぬ、チツジョの誕生が待たれるところだ。

本書の構成は、まず、〈膣〉の形状や機能から、Gスポットや処女膜をめぐる歴史、ムダ毛処理まで。その毛を「恨めしく」思う人にも「宝物として慈しんで育てている」人にも、それをどうするか決めるための情報がびっしり。健康や人権と、ムダ毛の情報に、等しく価値が置かれているのが本書の特徴。もちろん、社会が求める美やジェンダーを問う姿勢も貫きながら。

月経とおりものについて、「なんだよ。さては生理中



世界中の女子が読んだ！ からだ性と性の教科書

エレン・ストッケン・ダール、
ニナ・ブロックマン 著
池田真紀子 訳
NHK 出版
定価 2200 円+税

か？」という女性への攻撃は、“女性を下に見る意識の表れ”だけでなく、生物学的にも間違っている、とピシャリ。PMS（月経前症候群）の説明から、「『どうした？ あと2日か3日で生理か？』と正確にいつもらわなくては」とユーモアで反撃。また、「“タフガイ”精子たちの雄々しいバトル」と表現されることが多い受精のしくみも、「卵子はディーヴァ（わがままな歌姫）らしく、パーティにはわざと遅れて華々しく登場します」と、受け身で語られがちな卵子の活動性をユニークに描き出す。ポップなフェミのテキストである。

セックスは、「あなたに準備ができていますかどうか、それを判断できるのはあなた一人です」。相手に「ノー」と言うことより、自分で「イエス」か判断する力をつけること。そんな本書は、邦題の『からだ性と性の教科書』よりも、やっぱり『膣の幸せ』がピッタリ。〈性〉の学びは「性教育」まかせ、「教科書」頼みという日本の状況から、教室で、カフェで、バーで…もつと気軽に『膣の幸せ』を語れる社会でありたい。ちなみに、原著のカバーは、ファッショナブルなピンクの表紙にデザインされた膣のイラスト、そして『膣』の文字。持ち歩くだけでオシャレ。日本語版では、パンツを履かされてしまったようで…（しかも純白）。

紹介されている避妊法や子宮頸がんワクチンは、日本ではほとんど「未承認」。また、安定期を迎えるまでは妊娠を秘密にしておく「3か月までルール」は、流産を周囲に伝えるつらさから女性を守る一方で、女性が羞恥や罪悪感を抱えることにつながり、「本当なら、周囲の支えや気遣いが何より必要なとき」と指摘。〈性〉をオープンに話せることは、〈性〉を生きるさまざまな人を支える社会をつくることだといえる。

「自分の体について決める権利を他人に渡してはいけないのです」という力強いメッセージは、年齢や性別を問わず、たくさんの人へのプレゼントである。

（大阪大学大学院准教授 野坂祐子）